

## ヨーロッパの田舎に行くー楽しい田舎には伝統があるー

北星学園大学教授 杉岡直人

オランダ、ドイツ、ルクセンブルク、フランス、ベルギー、イギリスの農村めぐりをした。そこには、(都市に対して)生活の快適性に差を感じさせない美しい農村の景観と住宅が印象に残っている。オランダからドイツへ向かっていくと整備された道路と手入れされた庭のある住宅が目につく。農家の建物は、概して大きく、日本の農家の二倍くらいの大きさである。車による移動をしていて気になるのは、道路脇の草であるが、道路から幅1.5メートルくらいの部分をきれいに刈り取ってある。ある時は、土地の所有者が、またある時は、公的な作業員が刈り取っていた。日本のように道路脇の草が無秩序に生えているのは、確かに見苦しい。案外、道路に電柱がないのが作業を容易にしているといえるが、木の間の草も作業員が機械で刈り取っていたところを見るとルール化されているものであろう。しかも、私たち夫婦が生活していたイギリスのストーク・オン・トレントにあるキール大学構内の住宅の回りにある芝生は、確実に2週間おきに除草機をつけたトラクターが作業にはいついたので、おそらく美しい環境を管理することについては、歴史的文化的なものがあると見てよいであろう。

そしてイギリスの田舎で、ヨーロッパ大陸に比較して目につくのがキャッスル(城)である。城の数の多さは以外に知られていないが、とにかくよく保存され手入れされている。ところによってはあれた城跡があるが、多くは全国観光協会のようなボランティア団体のスタッフによって支えられていると見られるものも多く、大抵は観光名所として城跡の保全に努めている。車社会が発達しているためか、どこの観光地も人々の数は多い。考えてみると年間労働時間が、1,600-1,700時間で、早期退職制度のあるヨーロッパ社会では、観光地へ出かけて生活を楽しむ機会も多いのは当然であり、高齢者夫婦のドライブ旅行も盛んである。無論、日本や香港をはじめとするアジア圏からの観光客と目される者も否応なく目につくが。

ところで、見知らぬ土地に出かけて楽しみなことの一つは、町並みを見ることであろう。この点について、決定的に重要であると思われることは、建物の高さである。教会の塔よりも高い屋根の建物は原則的に存在しない。イギリスについて言えば、都市部における高層ホテルはエジンバラやロンドンなどの大観光地ですらそれほど多くはない。また都市の魅力は、歩き回る楽しみである。伝統的な建物があつてこそ歩いて楽しい空間が形成されるのである。伝統的な建物があることで優位に立っているのはなんといつても、イギリスである。イギリスは、国家間の戦争に自国の領土が舞台となる機会がほとんどなかったために17,18世紀の建物はもちろんのこと15,16世紀の建物もそれほど珍しくはなく、あちこちに点在している。昔から土地が肥沃のため豪農が多かったナントヴィッチという田舎町では、船を浮かべて川下りをするレジャーの盛んな場所としても知られているが、そこでは、毎月のように決まった日に自分の家にある骨董品を持ち寄って、いわばガラクタ市を

開いていた。別にここだけではなく、どこの町にもアンティークショップは必ずあるが、特に観光地に多い。私も領主クラスの間人が18世紀に使用していたというスペイン製のペーパー・ナイフを購入したが、アンティーク好きのイギリス人は「ジョージアン」（17世紀のジョージア王の時代の意味）、「ピクトリアン」（19世紀のピクトリア女王時代）という言葉が好きで、骨董品の時代の見立てをして楽しむ。われわれ夫婦もでまかせに「ジョージアン」、「ピクトリアン」を連発して楽しんだ。

伝統をこよなく愛するイギリス国民は、個人の住宅はできるだけ古い住宅を購入して住むことが一つのステータスシンボルとなっている。また16世紀や17世紀に建てられた宿泊宿や個人が建てた邸宅（市長宅や貴族の邸宅、マナーハウス）などを買い取ってホテル経営をすることも人気がある。代表的な例である「ヨハンセンの推薦ホテル」は、全国にある伝統的な建物をホテルにしたオーナー達の協会組織であり、宿泊客の数はせいぜい20-30程度である。そして郊外の田園地帯にある古いホテルは、伝統的雰囲気を楽しめるために結婚披露宴の会場として利用されたり（集まる関係者で貸しきりになることもある）、サンデーランチ（日曜日のフルコースメニューを前提とする昼食会）などを楽しむ場所となっている。

古い大きな邸宅や別荘には、広大なイングランド庭園を作っているものも多く、その個人所有の庭を有料で開放して、一般市民がそれを楽しむことができるシステム（貴族の特権に対する奉仕義務のようなものであり、ノブレスオブリージュと言われるものの一つであろう）があり、そのスペシャルガイドも頒布されている。春になると各地で庭園コンサートが開催され、テレビなどでも庭園めぐりの番組が組まれている。

ところで、観光地の条件としては、滞在コストがリーズナブルであることが肝心である。ドイツの田舎の宿は、大体が家族経営でイギリスのB&Bシステムより快適性は高い。夫婦二人で80-100マルク（約8千円-1万円）で、食堂があり、その食事のメニューもバラエティがあり、部屋のスペースもゆったりしている。ワインで有名なモーゼル地域の青年夫婦の経営する宿も、5,6室しかなかったが、セントラルヒーティングで食堂の料理のメニューも豊富であった。調度品は、古いものもあるが、新しいものでも丈夫で長持ちしそうなものが多い。そして収納スペースが十分確保されている。そしてイギリス同様、ホスピタリティは素晴らしい。

ところで、最近イギリスをはじめヨーロッパ各国で注目されているのが、「ステイ・オン・ファーム」というファーム・ホリデイ・ビューローのネットワークであり、イギリスでは全国約1,000箇所 に点在する古い農家住宅を宿泊用に提供するシステムをとっている。これはB&B（一泊朝食つき15ポンド前後）、セルフ・ケイタリング（1週間単位の宿泊で、炊事を自分で行って滞在する。100-300ポンド程度の幅で提供される）、そしてキャンピングピン・キャラバニング（一泊5-6ポンド）などの安く滞在できる農家生活体験の機会が用意されている。しかも優れているのは、障害者が宿泊可能な設備があるかどうか、外国語を話せるかどうか（イギリス人の場合は、フランス語やドイツ語などであろうが）などの細かな情報がガイドブックに表示されていることである。

そして彼らの宣伝分がユニークである。いわく1740年に建てられた農家であるとか、16世紀にたてられた農家であるという古さを強調する宣伝である。1560年に建てられたというイギリス南部のコンウォール地域の農家民宿に車で出かけた私たちは、昼間からロウソ

クを灯して雰囲気盛り上げている農場主の窓越しのスマイルと周囲に駐車している宿泊客の数を見て、気後れがして退散したのは、今となっては残念に思われる。イギリス人は、辺鄙などところに出かけるのを厭わない国民性を持っているのであろう。この農家民宿は、現在ヨーロッパ全域にネットワークを持っており、ドイツ、ベルギー、フランス、ハンガリー、アイルランド、アイスランド、イタリア、ポルトガル、ルクセンブルクにそれぞれ関係団体の事務局を持っている。まさに田舎礼賛のネットワークといってよい。[1992,8-1993,8 に掛けてオランダ・イギリス・アメリカにて研修]